

芭蕉翁春秋

二

庫文官政太				和
		二	一	書
		二	一	
三	四	九		門
架	函	號		

庫文閣内				和
五	二	六	一	書
八	二	二	九	
函	三	九		
架	冊	號	類	

内閣文庫	
番號	和 11629
冊數	3 ( 2 )
函號	158 404



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



芭蕉春秋前編卷之二

素六

江戸天地庵

葛飾素蓮編

貞享二年乙卯

正月 歳旦の吟

草枕 年くまな筆着て... 誰か... 此句は冬の日の年の歳旦なり

二月 日詳から古郷を去て奈良小至る

草枕 奈良小出道のなと春... 名もふる山の薄霞

○十日東大寺・南宗院の行法を拜む

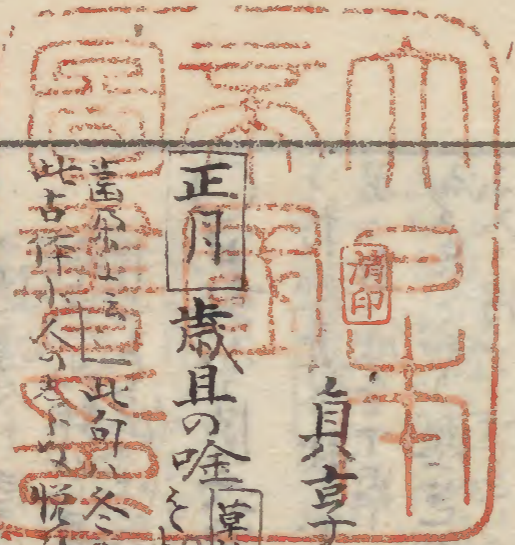
草枕 二月堂ふたまりて水と... 氷の僧の香の香

一書小至りの僧と... 今是小至る

○日詳から上京して三井秋

風の家小至る

草枕 京ふのかりて三井秋風... 樽の木の花小のまいなをくくふ



○按小芭蕉の橙の木の小秋風、脇あり又秋風、句、杖さたる點割の枇杷の廣葉、ふとこふ小、其小動く山ふしの花をふ芭蕉の脇あり

秋風傳 秋風

三井氏通稱詳、洛陽の富高あり、鹿粟集の作者、去来抄「梅白下」さうや、鶴とぬまもま、或集、此

句をりけて先師の妻をふらり此句をふつふとこり、是ハ物の心を弁え、以て評きり、秋風ハ洛陽富家小生きて市中を去り山家小、中居して詩哥をたのしむ、騷人を愛し、聞て彼小迎えらる、實小彼を風騷の隠逸人と思ひ給、文作あり、さうや、其後、さけし行給、今や此評を見、ふ彼、後論ある、良を知、著述、りや、さ、打と、り、砥吐、紋、鷄、狂、遊、集、四、部、り

○日詳、六條の旅、全、小、千、那、来りて、門、小、入る

目録文集、千律師遠、忘文、選、梅、二、女、小、芭、蕉

の翁、柳、青と稱して始て錫を坂西小、東の候、洛下六條の旅、舎小會して正風の真儀を丁寧小、尋正一、即時小、向上を悟して、既往の能諧ふ、能、註、多、良と知り、忽、芭、師の門小、入て、暮食を忘、是を、鍛、磨、一、終、小、其、神、精、小、入り、得、さ、さ、ま、古、翁、生、涯の、門、人、數、千、師、ハ、其、一、老、あり、坂、西、小、千、那、東、關、小、其、角、と、ひ、ひ、て、ハ、頭、と、く、者、か、註下、滑、替、侍、古、郷、伊、賀、小、三、飯、付、信、の、紀、と、草、枕、と、野、さ、ら、の、紀、行、と、小、大、津、の、千、那、尚、白、青、重、三、人、師、と、頼、む

○辛、崎の、松、ハ、花、さ、ら、お、月、ら、よ、て、此時の、夏、り、○按、小、千、那、尚、白、青、重、と、小、正、門、小、入、り、ハ、同、時、お、ま、と、千、梅、の、歌、小、よ、き、ハ、千、那、ハ、獨、り、京、小、お、り、て、芭、蕉、小、見、え、さ、ま、ハ、彼、三、子、の、中、千、那、を、以、て、始、  
尚、白、青、重、ハ、千、那、お、次、け、り

千那傳 千那

江西堅田本福寺の住僧、多り法号、感應院、名ハ妙、式、章、て、律師、小、任、初、ハ、能、諧、を、洛、の、趣、本、寺、高、政、小、學、ハ、名、を

宮山子と号、後、正、風、小、飯、して、名、を、千、那、と、更、や、蒲、萄、坊、ハ、小、宝、永、也、  
年、三、月、江、戸、小、下、り、千、梅、深、川、の、自、娛、堂、小、掛、錫、も、る、夏、三、年、後、與、羽、信、の、  
諸、因、を、経、歴、して、江、列、小、歸、享、保、八、年、月、日、元、年、七、十、三、同、門、評、千、那、上、方、  
の、高、房、小、て、器、七、勝、て、よ、論、を、ハ、尚、白、器、ハ、鈍、小、て、重、く、千、那、器、ハ、勝、て、  
い、き、過、り、花、實、ハ、花、過、り、さ、う、と、や、を、得、る、故、小、弥、實、を、徳、と、味、  
り、風、雅、を、ら、世、用、ハ、つ、ら、な、り、残、り、な、ら、る、の、風、雅、を、ら、の、世、用、ハ、盛、  
る、小、派、身、小、押、領、を、ら、た、之、ハ、脚、臂、の、虚、を、煩、小、人、火、氣、ハ、成、小、上、て、わ、  
つ、ら、小、残、り、な、る、脚、去、を、焼、が、派、身、小、肺、の、氣、も、よ、つ、ら、ぬ、故、小、水、を、増、を、  
夏、や、一、久、く、師、説、小、放、し、流、行、小、堀、切、生、来、や、つ、の、世、用、ハ、火、氣、ハ、上、小、  
よ、り、て、元、氣、派、身、小、弱、り、病、の、愈、る、期、ハ、つ、ら、や、此、人、能、諧、の、言、過、ら、と  
つ、ら、我、と、ら、ハ、面、白、く、思、ふ、と、之、も、人、曾、て、嬉、し、く、た、之、ハ、卯、月、朔、日、夜、更、  
の、日、紙、帳、を、賣、小、事、人、り、師、曰、是、い、き、過、り、ま、る、も、其、と、一、寒、く、く、して

公燧をもち進ん人の上をさる内小なる一しと思ひて  
帝帳くんとそ人気が移らば雅有たごころ

三月 日詳を以按小八 伏見西岸寺の僧任西岸寺三世の 小見也任僧名八室譽

○十日加水未 伏見西岸寺任上人小達て  
○十日加水未 考小文書日也

文書の切き

我衣り伏見の松の市をよ  
世の中をわたりて一衣穿く衣象今く何は公わらふと云く本年  
我入く移る世をよくは洞は中へ後へ人々たふと空

十一  
加水松  
とむ成

○日詳を以大津小至る路中の吟草枕 大津小至る道山路を越て山路  
路来て何やら甲のー草草赤双紙

山路来て何やら云々こゝへ何と云ふ 小河やらとり後かへらま待る  
師の心の動さるる山路小至るとつり 山路小至るとつり

○堅田  
覚束分し難く有房郷のこゝ山す紫のつ本と云

本福寺小止錫して湖水を眺望草枕 湖水眺望唐崎の松ハ花  
よて一夜能諧催さ進んふに傍より芭蕉公和の名句に進んでや待ると導ら

と折々の横嫌もて大津尚白直して辛崎の松ハ花より何れもそ

其景色さくともさくともつるひ侍るやとまたは又に傍より中古の

此作小ふけりて是非のさるい小本意をわほし進ん人き出て此句誠小能

諧の骨髄を得る進んもたさる切字かまえて名人の格的ハささるの

委をとも渡向とわがーやと不審なる言小哉とるの渡向小もて留

の房三を嫌へふよりてあらるる臆武とり向るまきとて向小句かして

かくハ下トトさるるのふと一職してしまへて哉とる猶微  
た多郷音の侍る向中の句他小的當るる一此論を再ハ公和小ト述侍まハ

一句の向言小もてハ然と一但下り方寸の上小分別かしてハハハハハ  
り入ハ小駒もて比良の高根の花を見らるる只眼前るハハハハハ  
○按小雅談集小もてハ湖水那壁の喑ハ大津尚白事多矣論おけまを芭  
蕉の干那小贈り一五月十日の文書小也え評るの内得果流とて珍希ハ其評

よての一句「唐奇の松云」とも是れ六ふもといふ千那家よての作るる一故小  
千那亭よて湖水脚望のよて本之小注云「此文書五月十日の夕ふ出たる金見り  
い〇止錫中尚白青世門小入〔清集傳〕大津の尚白千那青世門師と  
頼心千那の松云「此時の交ふり」

**二子傳 尚白**

通称江左三益といひ一号木翁と稱す初め洛の高故の  
以人あり享保七年七月十九日死す年七十三〔同門評〕尚白是

と上方の高房あり師説十久しく隔るる六孫曰深の病發しう彼ら畧  
の鈍しして重き所小一風の胸切る所あり師此胸切る受を助て用ひ  
給えりた之ハ丑人持の大瓶の底の杖なるが一年ほどは接し不集と作  
りんとす時師次身小流行し給ふ小寄てかゝて説く此のよふ力落  
て今小其集をばして年経たた之ハ深き井の下小落ておほく人何師  
の助小寄て水除きて引上給り其時ともろろと忘まて爰ハ世と  
思ふ時師ハ井輪の石垣をこねらつてかゝらるる此所へ来きよと  
おしり落るる人師の真似して別上らんとする時例の鈍き重き畧ふ  
はハ本の水底へ沉むむもの迷てゆらぬ女をさるるが今とて一度師の  
助小依て水除して引上らるる其道より年してとせらるる次身ハ  
小石を這ひ輪を擡挙て上り侍りハ  
〇青世〔通稱詳〕長元録三三年  
重く鈍くとも流行するまらりる

〇日詳るる水口の驛小泊て旧友小會也

〔草枕〕水口よて二十年の故人小  
逢ふ余らう中ハほる櫻云

〇廿七日熱田小至り桐葉亭よて非諧興行

〔何らか〕何やら  
桐葉以上三吟歌仙成る熱田三

歌仙の具 〇止錫中非諧興行

〔伊豆の具〕櫻の桐葉芭蕉叩端  
用木東藤  
工山以上六吟やして十九句成り  
桂梅出席して

歌仙の熱田三歌仙の其一あり去貞享元年十二月興行の鴨の巻  
今此二巻を一集して熱田三歌仙と云板行して流布也

**四月 雲水の僧**

〔名未〕芭蕉の止錫を訪ふ〔草枕〕伊豆の国蛭々小島の  
兼門是も去年の秋より行

肺りら小我名を聞て草の枕の道つまふと尾張の田よて  
何とてまふい来るまはハいふとも小麦穂喰らん草と云り

〇春日旅僧

小大巖和尚の死を聞て其角小書之贈る

〔草枕〕比僧小吉て曰圓  
覺寺の大巖和尚今年

睡月のくしの邊に給ふよて夢の心地をらる小  
道く其南の許りまらる梅意て卯の花并い後ハ

文書 新山家集よ出り  
字枕月を字し小余命馬もかく今從つて小紙を尾張熱田小吉を

傳同何人初小若て國定大難を為さし一月の初付をわの  
ふふいむと木の分び小わて遷化し移すし一もやふ少侍を  
よひの書者といひわふしををりしつわ節の候少しせ先一物授  
札七を

初を之介の公初といふこと  
カ角経生  
とてい

**大巖傳** 大巖 三列の産より鎌倉國覺寺百六十二世の住僧貞享三年正  
月三日九年辛未七生前易字小達一詩を能く著述四六

文章有り又俳諧をわして名を幻呼と稱す小傳其角の新山家集より  
えり宿禰は思ふ其角其金地院前小住て産栗を遷る頃大巖つる圓  
覺寺小住職せりて金地院小  
りりて交白字より

○美濃の如行公初の止釋を訪ふ 西の東の如行 叩端 開水芭蕉  
桐葉 東藤工山 桂梅 以上八吟よて

歌仙成る幽蘭集小貞享四年 ○止錫中杜因小留別の喟を興ふ 厚  
卯妻とよるハ誤る

杜因小かく白女子小 ○日詳ふは留別の喟を止めて桐葉の家を授  
羽ぬまく蝶の形見え

足す 草枕 再の桐葉もとも小つて今や東小下り人ともる小 杜丹葉ふり  
く今出る蜂の名残ふ ○按小幽蘭集小再の熱田小草鞋を解て桐

葉の家をわり 又思ひ立て 杜丹葉ふり今出る蜂の名残 芭蕉引  
るハ葉の葉を橋一跡の字ハ 桐葉 王と云ふ

○日詳ふは鳴海の知足芭蕉の飯路を留む 千鳥掛集 飯路 芭蕉行  
所の頃ハ 其草よ昔妻

路 三田知足 ○同舟よて俳諧興行 かろく 芭蕉 知足 桐葉 叩端  
業言 自笑 如風 安信 重辰 以上九

吟よて二十四句小止む千鳥掛集小出り ○按小鳴海の知足舟よ至る受草早  
枕小閑き且千鳥掛集の序同集ハ及銘の序も小貞享四年冬々芭蕉同舟小

至て星崎の吟りし書さるハ世人多くハ其時を止釋の始として此俳諧の  
年月を詳ふる者今知足其草の句を考ふ芭蕉東よ下ら

んとするをこめて其草よつる路よ之を吟したる又句意明らかり  
然まハ芭蕉の東海道を其東小下りし受前後ゆけまハ此詠向小疑

ふー又杜卷の巻小桐葉叩端の出席したる古宮の驛より鳴海とて芭蕉  
を返り来するふ人一書小此杜君の句を八橋一見の時よりさる人ハ八橋

の石跡ハ三列岡崎を八町入て八橋山無量寺とて寺有り其田を彼の石跡より  
鳴海より八橋よて六里小足らるの所ふハ熱田鳴海の人々芭蕉をてあす

のりり、彼の石路へ導く者、○日詳から甲斐国小入草枕甲斐  
知是等と侍後小入をきりの山中にたり

寄て「行騎の妻小ふさむと武」○按小真享四年鹿島吟行小甲斐  
国より武人の得さきる。檜木もて造る。笠を各つくさく見之身享子  
元年と甲斐小ふさむと終馬記小見え、此ハ芭蕉ハ殊小志くさ  
友ふさく諸書小名を注す。惜し丁威美ハ六祖五平と考ふり、書り然  
や否。○日詳から江戶小飯錫も草枕卯月の未庵小旅の方とて  
らす。衣も、風と、

くまじ」○按小史邦り小文庫小卯月の始庵かると書けり、誤り、妻  
小於て草枕の紀行終る。

**五月** 十二日千那小書を贈る

文書

其書におとほさす、由私にきき、其を添る、内は兼後、物書り  
其件とての一句  
幸侍のねり、きり、おひらきと  
とほさす、いふ  
ゆは、まこと、ゆる、ゆる、一筆、くさ

其卯三句、まきり、侍、まきり、中、いふ  
世は、我、の、い、む、は、長、旅、を、幸、も、る、の、い、ま、は、は、侍、を、お、ら  
小口、海、を、好、半、思、念、好、く、ま、き、り、の、侍、に、お、は、ま、ひ、は、い、む  
一、其、角、の、内、情、定、ま、は、侍、の、魂、を、他、國、に、お、は、ま、き、り、は、侍、ら  
い、ま、は、侍、の、女、久、く、お、は、ま、き、り、の、侍、に、お、は、ま、き、り、は、侍、ら  
一、涙、谷、よ、お、は、ま、き、り、の、侍、に、お、は、ま、き、り、は、侍、ら

六月 千那き傍

芭蕉松ら

**九月** 十五日其角芭蕉庵小来て夢想の喟と語雑談集小 真享乙

深川の八幡宮小詣侍、派小芭蕉庵を訪ひて「松原のむき、向を見よ、時雨哉  
と、り、夢小、侍、り、と、語、り、ま、は、現、ハ、か、る、口、清、き、女、ハ、及、ふ、り、と、り、さ  
ま、り、魂、の、遊、小、所、ま、き、り  
虚、霊、不、昧、も、ま、き、り、知、る

月日詳から、冬、芭蕉庵を、終、後、と句集 再芭蕉庵を造り、嘗て、同最  
て、く、や、此、身、ハ、ま、の、古、柏、○按小深

川芭蕉庵、四、の、堂、へ、夏、終、馬、記、小、見、え、ま、き、り、の、侍、に、お、は、ま、き、り、の、侍、ら  
元禄五年三度の書小願て疑が、然、久、小、其、一、度、古、書、小、見、え、ま、き、り、の、侍、ら

らん式に貞享二年と一又同三年として一定ふりかへし今句集の年次をよると  
ころを以て今年とせし但芭蕉庵を造まる前後を考ふ小貞享三年を以て過二ふり

貞享三年丙寅

正月 元日能諧興行

鶴の春をさすふ 其角 文鱗 枳風 工齋 芳重 杉風  
仙化 李下 舉白 朱弦 蚊足 知利 芭蕉 楊水

不卜 千春 峽山以上作者七人して百韻成る是を初懐紙と云濟誓傳天下門  
人数千の中たふ正風の伴と得る者少く初懐紙の頃杉風嵐蘭其角

嵐雪 曾良 寺江 小  
在て隨社也

作者傳 文鱗

鳥氏 虛無齋  
と号す

枳風

正風の古哲あり  
姓氏詳かり

工齋

姓氏  
詳かり

ら元禄元年七月廿日卒す 辞世 荒野集に見えり  
骸を浅草誓願寺小埋む其角乃い嬰の悼あり略之

仙化

姓氏詳かり  
家奴と半郎

とふ貞享四年八月仙化の供して舟小遊ひ各月の一向と唯して芭蕉其角  
の歌小らつる其時つる名を吼雲と呼まらる夏ハ雅詩集小見えりさ其ハ  
其主りつて此匠り仙化す

舉白

草壁氏元禄の頃卒す  
編書馬蹄或百韻り

蚊足

川氏丁次郎と号す其角  
新出家集の筆者とす

不卜

岡邑氏石田未得の門人一柳軒と号  
す 堀江町小住す元禄四年四月九日

率す平河山  
法恩寺小埋む

三月 廿日能諧興行

花さいて七日 芭蕉 清風 舉白 曾良 工齋 其角  
嵐雪以上七吟て歌山成る 編書小三月廿日即興とり

一橋集小  
歩り

作者傳 清風

羽列尾花澤の人なり 鈴木氏通称詳かり 芭蕉奥羽行  
脚の時数日止錫して旅労を休む 著述 日本行脚文集

一橋の二 曾良

慶安二年信列誼方小生す 俗名岩波庄右門正字と称  
す 弱冠より勢列長島の城主松平能登守定政の家

小仕ふ壯年の頃故ありて半浪か二君小仕えりて身を雲水小高き  
東都小来て吉川惟足の門小入り 和哥と學ひ其頃より稱と轉て河合  
惣五郎と呼ぶ貞享の頃蕉門小名りて其角嵐雪小亞て稱望とらる  
事ハ許六の濟誓傳清風一橋集小見り年三十六なる元禄三年三月廿  
七日年四十二を以て世塵を脱ま髪を剃り惣五と轉て宗悟とら是よ  
り先貞享四年八月師小隨て常の鹿島小吟行 元禄三年三月奥羽賀越



の旅小隨の質列小別して獨勢の長島小至る是古君の因ふまじや芭蕉の奥の細道を按きし元禄四年の大和南紀水道を求り江州の京に入りて洛柿舎して師小面一同十五年秋信の吏料小至る古郷小行く宝永七年春西列の旅を思ひ古郷小送る一句有り詞書小六十六部ハ九早ふまじしててわらまじ指将筑紫下りの志いやくは春小我と食やちもけく一試日詳るは江戸を敷くさるよ及ひ壹岐國小渡り國國勝本小死を質小丑月廿二年六十二ふく法謚賢翁宗臣居士とふ怪貞徳は神其遺書る子とわらふく春小我とふ句を辞せと定る諏訪の正領寺小墓碑をいふ心曾良の兄弟小由心とふ者あり事跡詳るは

○日詳るは草庵小幽居して蛙の句を吟を其角是の首句を論と

春日古池や蛙飛ぶ水の音 菅松原 春を武江の北小岡給えと雨静小て堰の声ふく風和らふ小吹て花の落る音おそく弥生を名残かき頃小やわらへ蛙の水小落る音おそくふらねい言外の風情此助小うのむて蛙小こむ水の音とらふ七五ハ風一給え吾子小傍小侍りて山吹とふ五文字とわらふと侍小唯古池といささかうやとらふと論は山吹とふ五文字ハ風流やしてとらふやうな古池とふ五文字ハ質素ふして質

あつ質ハ古今の質道ふまじいなりとさしよと花質のふまじ其時小のをり物ありと

○此春向米新の憂ありて草庵小在 泊船集 観音のいふ見やりつ花の雲其角は口鐘

ハ上野の浅草とらふ前の年の吟多し病起の眺望とらふ一聯二句の格あり句を呼て句とす云

四月 十日常列潮来本問道悦 能名目準續 小醫術の字誓詞を

為也 誓詞本問氏家蔵 写成美の隨筆小見の

誓詞 相傳醫術唐迪院一流秘書秘法那皇漏他手若松達并老大小神祇別生縁氏神可蒙所寄也や仍る起前文如伴

貞享三年丙寅三月十二日 本問道悦標 物部道意並 松尾松之丞

六月 日詳るは和漢俳諧興行 切風口小日々下 芭蕉素堂兩吟して元禄五年八月廿日記小出り

八月 去来伊勢小室より旅記を贈る芭蕉跋文を選て稱美す

跋日記 いつもの時の秋もや去来千子も伊勢詣の頃道の記書して深川小舟より  
うら小舟書りの廣美海よりして一函をのりてのりよきおふら秋の風公羽

伊勢紀行の跋

跡ふら草の花もふく賢もふらに只浅き口小ひの...   
のせふら其角をせ都の空小旅集キ...   
そちきりりりて酒のみ茶小かす折く...   
浅きより深きと傳えて終小一揃て百川の...   
年の秋といふ...   
泊り...   
さるを覚ふ此人...   
東わ...   
杖の風

此月間春日集る尾陽小板行も 滑替傳 名古屋より野水荷子...   
この杜園冬日の俳諧を選り派の春

春日打つて... ○按小春日と七部集の其一小加え...   
何九刺更等の説あり此更賢小芭蕉小なり...

其一ふらハ板行の時... 時を... 小むのみ

十二月 嵐雪師小春服を贈る 夏四年正月...   
○日詳からば俳諧興行

冬景や人... 濁子其角芭蕉仙化松風二齋...   
哥仙成ら幽蘭集小出らる同書小真享四年...   
誤らる三年小交さ下

真享四年丁卯

正月 歳旦の吟 續虛粟 句集 嵐雪...   
着るまハ誰... 今朝の春

三月 草庵の吟 續虛粟 花の雲鐘...   
○按小此句...   
花曇り...

米仲も勅隨筆 ○日詳からば孤屋芭蕉庵小来て雲雀の句を吟

續虛粟 草庵を... 鳴雲道 芭蕉と聞...   
○日詳からば去来江戸小来り初て師小見え能諧興行

去来 芭蕉 去来 芭蕉

其角 嵐雪以上四吟して哥仙の俳諧拾遺 幽蘭集小出なり ○按小去来の江戸小下り一受つて故人のいさる所なりさきにも此哥仙の一卷世小流布せり  
 之ハ後人の考を以つて思ふに此俳諧其角の家にて與行けりや其角去来を以つて芭蕉庵小来り一時ある其故ハ芭蕉の服小旅する友をささひお春とりの此句意より其角への核移るなり 其先去来の正風小入りハ真享元年六月其角千春と共小上京して芭蕉集の五哥仙を選り時去来の妹千子其角寺と吟會して同集の附尾の一卷をふりて其時去来も其角小因て正風の奥旨を聞て後小伊勢紀行を芭蕉庵小贈るなりハ前段小行たる伊勢紀行の跋文小知まかり然る故小去来江戸小下りハ先ハ其角を小訪ひ其角小いさるにまて芭蕉小具えざるなり 芭蕉の服小旅する友をささひお春とりの此句作おつる解也 又此俳諧を今年と定るハ續虚集今年五月十三日其角の母の五七日の追善各悼と題する中小去来の一向あり集小各悼と題したまハ一席をふりて者のを ○去来花の句を吟で評吟るなり 又去来抄小より所あり

と受く

去来抄 和日山越つ花さるり 去来是ハ猿蓑三年前の吟多し先師曰此句今も人のいさる 一兩年を待たしなり 其後社

○去来花の句を吟で評

国々徒々吉野行所へ給ひる道より文小武ハ吉野を花の山と云ふ武ハ是ハくとしらと聞えり小魂を奪ふ又ハ其角ハ櫻さるるなりハ小氣さるるをみて吉野小菟句もふりて只をく日ハ向山越えりといひ吟行侍るなり 其後此句をかり人よりけりる今一兩年早なりといひて知り給ひらん 即ハ却て其句も志さるる受さるる ○按小翌元禄元年の吉野行所の前と云ふハ今年去来は江戸へ来りて師小面と一時あり

去来傳 去来

向井氏名ハ兼時武ハ義馬何より是る多と知らば通称平次郎 肥前長岑の産なり 父玄勝ハ彼地の儒士多し 後京小来

て禁中の官醫習とありてハ庖厨和名本草十三巻と著きり兄玄升法印能く父の業を継ぐ故小去来も父兄の隨て壯歳より洛小住り武を以て業をせむ又陽陰の字小長 後年是を活計とす 真享の始差我小別業をいさる元禄のころ舎小名アけて落柿舎と稱し元禄の季落柿舎をせむら南禅寺聖護院のより東山小又家を造り妻小妾を任して一女を生じ是よりさき 真享元年六月洛小住て其角小會り正風の奥旨を揮て蕉門小入り 真享四年より師小見ち宝永元年九月痢疾を患て死す年五十三なり 東山真如堂小葬る 同門評 先生の風雅を論る其器もくまてより花實を以て花ハささひて實ハせらるる天姓平く生きたり給ふ小寄て難ていさる取さや少くはる 故小不易の句ハ多しまも流行の句ハさくさく論ハ衣冠束帯の正し人遊女町小立る如殿上の交り小たてハ一人と稱し遊女町のささやカケ

延宝二十歌仙の内  
 揚水の句云勝日夜  
 兼物ておすしとふ  
 勺あり向井玄勝  
 ありをいさる

正風三十六俳仙之影像

Faint vertical text columns within a rectangular border on the left page.

Faint vertical text columns within a rectangular border on the right page.

たし師説の月雪を経る故小天晴中華門人の弟と稱せり  
水とすうらう月雨一雨の地も落さず時雨の  
文字はと一代の秀逸いんまの師の句と云ふも上か三  
くやや者なる風俗文選去来誅詩維宝永甲申の秋九月落柿舎  
の去来平也ア悲しい武此郎八白丹氏玄勝老人の赤の子小生まで筑紫の  
方おひらら名平次郎虫を業若う時洛小居す只矢を  
捨て十五年と吟うたは十五年先の受あり合せて三十年来の大隠士和名是  
を浪人といふ多ううらうの頃より先師蕉翁小具えて風雅の名高かり  
京師小わきて諸子のあつら小座は南西の氣をわき東北の風を護を  
天下蕉門の高身と稱して野の時正風体のあつらう閑て湖の水  
のそらり五月雨とや猿蓑の選を恭りて不易流行の巻をわら後  
獲の新風よのそらも終小幽玄の細く忘まう用の地も落さず時雨  
風とすうらう月雪の十文字とハハけり又とまの仲秋や若う  
あまもぶらう月の客と吟して先師の耳を驚け月賞歌の身一古今  
の秀逸も極まりて一代秀逸の二句もて人々稀う此たの  
ハ小教向小及り二十余年薪水の切積り暖帳の落柿舎小師を迎  
石山の幻住庵小老を訪ふ心し隔くて一せ難心の表を聞て連小こ  
もつらと解き義仲寺の葬も眉衣小細糸を携ふ死後の城を

堅く守り諸生とてあつち初心を助く越の浪化小かりて有磯磯の書を選  
し奇の卯七をたぎけて浪の鳥をりつじ此秋我大願小力をよせて文選序者  
の一人よとて病床小伏て三度自他の書を奇きまふうの蕉門滅亡  
り月日やりうむ去年の冬ハ中越の院家英給ひな今年衣更着文章  
卒も秋九月廿郎去て年まき思ひをよせて人の腸を断を  
けるそや猶生残りな十大弟子の中も世のたすけとありな子とあり  
其人彼人といふくわと思ふも有一徒来の同縁うらうえ  
りてあるも同一痲疾のやまひをうけて共小終をこまう身貧困清  
寂の高小遊ぶあう老兄法印の孝養をこまを連係して常ハ心あか  
ぬ餘所のいさふもいさうくりる時ハ根家親王の御護小候遠近の来  
客小對し四時の運氣を案一二六の陰晴を考ふささく老鳥の細を  
こまは月雪のいさ小情をあやと病りて起臥のさしさを知らは  
とらや猶思ふ人のあまもよめて此夏彼夏仕早よ今宵ハ本の下  
露分をわけて小秋もよと秋去はんと云ふまのむまもよ中ゆか  
ぬさりのと出来勝て初夜過ぎ雪駄の音も程なくま月より夜のま  
のこまおわゆる又の日本はあてこく例のこま心のことるはわ  
ふくてそら度小昏いつ夕陽小がさけり今宵もそと物公陽の  
ミ一みう羽織小長刀足くや小きり出て東のうら小むらう天

晴私の堂の藪うらら麓谷望の見まはるわの取付はまもほ  
名ハ加茂の早瀬小あふせと川風寒も千鳥く啼て下底らる聲つくらひ  
仕とてさる小たつと明て打たるけりひまやうふさくふて行公ほ  
てさる方小向ひ笠引もせやうふさくふてさる心地つさるはと四音の  
さる小珠と見るふてさる元結のむやう小落けさる心地さるさるは  
さるさる更くらさる小節小袖の深さやうもさる其夜の梅の魚て膝のさる  
まふ打ふさるさる小夜さるさる更て衣手さるさるさる明さる  
更さるさると更さるさるさるさる南禅寺の豆宿田屋も曉をさる  
白川黒谷の籬も手杖のさるさる間をばさるさるさるさる帯引さる  
刀もつと氷まの朝川廻て小亭中さる比京さるさる今ふ  
時の人さるさるの中さる思ひさる現の塚も千々の思ひを碎さ娘の生  
さる其子の母の行来いささるさる見果つさる

大草々々  
元禄十五年  
薩摩遠馬

やうけやうさるさる又さるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

### 五月 十三日 其角亭小亡母

四月八日 年 法名妙勢  
年 辛酉 麻布上行寺小築

### の五七日 追善俳諧興行

且甲の花小母  
菖くさるさる芭蕉 其角 嵐雪以上序三近小止心續産亭小出  
且同集小諸子の悼の唸り今思て略せ

### 八月 十日 其角仙花草庵小来り 芭蕉を誘引て三股小舟を泛心

雑詠集 丁卯の年 芭蕉庵の月見心で舟催してさるさる各月や池をさる  
て夜もさるさる翁さるさる舟小さるさる出さる小清影を争ふ客の舟大橋あわの  
さるさる酒つらさるさるさるさるさる溜さる小舟さる乳雲公羽を始我  
さるさる感し且取て九つを聞て飲さる羽化登仙の二子仙化小つとて雲  
を吼の心をとりて連衆さる半四郎とさるさる其後も委句多

○月評をらば曾良宗波を伴ひて常の鹿島中吟行也  
按小鹿島 紀行の風俗

又選出出で又竟保年間秋山の社後嗣來本間氏小傳り一槁本のより一  
て別本を板行一又其後梅人も別本を板行す三本と云々言すは同一  
鹿島紀行

洛の真室河元の浦の月見小行て「松平千や月三」夜中納言とひく狂夫のむ  
りも多しうささす此秋鹿島山の月見むと思ひ立交りいば人そ  
りむる浪客の士もく水雲の僧僧の如く多る里星の衣も三本の  
袋を纏小打竹出山の尊像を厨子の中に入れて脊中小背扇を柱杖  
束ぶして無門の關もさるものもくちかちか歩して出な今もりの僧  
もつらに借もよほけ鳥鼠の間小名をわらうの身も島もと渡りな  
るくも門々舟小乗て行徳とふ所小舟舟をりき馬ももの良細  
怪のちうたわさんと歩行よりむく甲斐の國より人の得させる  
檜本までけくまらききおのりいさよさよといて八幡といふ里を過ぎ  
わらいの奈とふむらり野りう拳向の千里とや目もこころ小見慶  
さけく山向より高く二峯ふらひ三て竹の唐士の双剣の峯りし  
陣へ一戸山の一隅より「雷」のりすむらり夜はまの葉はふり我門  
人嵐守の句もふもて此山日本武尊の言昔すはてして連舟も人  
のくももも名付たり和舟ふくわらり句もくい過るふか誠か愛も  
さし山の安もくわらり「秋ハ錦と地小舖から人わらり」島仲長横小

折入て都のお産小持さるる上風流やうもはらりうもくあけか  
りや尾花さるる合して小男鹿の妻こふ声いとたきまあり野の駒の所得  
顔もむきりく又りもよかり日ほて小盛かむ程小利根川のわらり布  
佐とふ所中ほく此川とて鮭の細代とふものもたくて武江の市もわらり  
者りり膏のかと其奥家小入てやとら夜の宿もくさし月隈か晴  
らりり小夜歌さしきし鹿島も全る昼より雨志きり小降て見ら  
るくもちらり無小根本寺の先の和尙今いせとのもて此所小わらり  
とふも聞て尋入て即ちまきさるる人をして探者とて渡さしむと吟  
らむささく清浄の心を得ふ似たり暁の空いさる晴のささし和尙わらり  
らり給小まは人々わらり出な月の上雨の音たわらりき景色のと  
むひわらりてまき言の奈もかてとて月見小来むる甲斐もささ  
て本意もくいささふとむ彼の何果の女まら時馬の哥り得よとて取  
りまらりいハ我ららり能荷擔の人からり

秋本  
寺も存てまを影る月見もか  
雨も存て竹起る月見もか  
月三楳一壺の軒端の雨まつく  
柳青  
曾良  
宗波

秋山

わたりく小ねりな空の月ふけ  
ちりのるるのそよ風のそよ

和尚

○鹿島小行て佛頂和尚禪室小泊

夏ハ前段小行ける鹿島紀行小  
詳なり○按小紀行小混本寺の先

の和尚云くふの芭蕉の師は佛頂和尚の夏あり枯尾花小元来混本寺佛頂  
和尚小詞法してふり開禪の法師とてそよ二氣鉄鑄生いそひひなるもま  
老身くろけくま小句毎のびいなる姿まとも自然と山家集の骨髄を得ら  
まざる有雅やとり又深川海辺大工町臨川寺の寺説ふ小開山佛頂和尚の  
寺小住職たり一時樺平寺領と鹿島神領と相混るる遠誇り故小公訂  
て延宝年間より貞享年間まで凡十二年江戸小在り其間住る草庵と後小  
寺ころして臨川寺とふ故小佛頂とて開山祖とす芭蕉も其頃禪を學ひ  
たりと今臨川寺と芭蕉庵の古跡の地と相考小小名木川と隔るるのそ  
尚甚近又佛頂も芭蕉庵小未まる夏ありそよ芭蕉の文書小志らまらる文  
書と左ふまらして後の考小備ふ此文書疑ひなふらふに恐らくは偽作  
文書 年月宛名詳なり

早必佛はわらふ由状をきくと別王をさるわが御印熟後信ふ本本  
の角のりどら先感心はさる病寒小病とじて後房のそよ年終小大休  
悟悟の情ひ發入るる和尚の行陽りそよと探ふまらるるを詳なり

二行遊るわらふと書流かきりそよなれば病とこそらとと 足巻をてのそよ  
うまそ一夕は入大んくありして後いつてるおす  
おさたらふ入るは怖くやそよのそよ  
とゆりふ殿を法半とらふとさるそよおさるそよやらふそよやらふそよ  
れものそよ其公ははるそよとらふそよとらふそよ

佛頂傳 佛頂

法益可南鹿島混本寺中興の祖江戸深川臨川寺の開祖な  
り混本寺ハ濟家の禪小して洛の妙心寺小属り正徳五年十

二月廿八日下野赤原の大中寺小寂り年七十四奥細道雷國雲岸寺のわく小佛頂  
和尚の山居の跡りり開山授の五尺小たふ草の庵むうかともや一雨ふるさけ  
と松の炭して書付けるそよそよ聞給ふ其跡を見むと雲岸寺小杖を  
引く乃至さて彼の跡ハつくの程りやと後の山小寺堂とハ石上の小庵若法  
小むすい掛る妙禪師の死開法雲法師の石室を見りか一木つそよ庵  
ハ破らば基本ととらふとらふ一句を柱小残一侍りむ

○鹿島の社小詣

紀行秋山本 此松の  
實生そ代ヤ神の社

○田家の吟

紀行秋山本 田家の吟  
うけし思ふの鶴や

里の秋 賤の子や稻

○野鳥の吟

紀行秋山本 野鳥の吟  
一夜ハやらせ山の犬

○廿五潮未



# 本間自準亭小至

姉行與書小真享下卯仲秋未昔より紀行社本小出

〇按小曙やせ夜三日の月」と云の句を南未より阪路舟中の句と

九月 日詳から長草庵小嵐雪未て裏虫の声を待つ

續産案 表 出の音を聞

小来よ草の庵 芭蕉問やうて 〇日詳から長遊園堂小て芭蕉の

# 古郷小行く餞別俳諧興行

時ハ秋ハ野ハ露沾 芭蕉沾蓬 其角 露荷 沾荷 沾徳以上七吟とて哥仙蔵

伊賀餞別

# 作者傳 露沾

下野更利義英君ハ奥羽岩城候徒四位下四品左京亮内 藤義泰侯ハ嫡男よりシタ故ハ永世を継給ひて 露沾子ハ家督を引給ひ俳諧ハ義泰侯風虎子附山守の流を継ぎ給ひ 後ハ専小正風を信引給ハ但高貴の教成よして露言沾徳沾涼 等の大家

# 〇沾蓬

室生氏通稱左大夫中橋大鋸町父室生將監同居 中橋能後者あり 結構裏の頃沾圃と稱し 後玄圃と

ア 〇遊園堂と稱 傍也亭ハ溜 池の真名各字給ハ

更む元禄七年小住より金見より一老年富永七太郎と養子とあり延 享三年十月十号九年ハ七七法名日久 雅談集 鬼女の面ハ般若何ら女より

古来より角あり面あり黒塚の能の位小思ひ合を侍ハ全一念の鬼女 といふハ何れに唯翹翹の類いありとて源助小下て新くく角あり 面をうりせりハ時小よりての工風ふるんやとやきせい小ハいともい

〇黒塚の誠おもひし雪女其角 水間氏岩城候内藤家小住其時 然り付目より白草の三葉沾蓬 故りて飛鳥井家小哥道の與旨

〇沾徳 水間氏岩城候内藤家小住其時 故りて飛鳥井家小哥道の與旨 〇沾徳 水間氏岩城候内藤家小住其時 故りて飛鳥井家小哥道の與旨

〇日詳を以て後致仕して俳諧を以て業とする元露言の内小して沾葉 とふ雨露言露沾子小隨小時共小露沾子小學ふ其時露沾の文字を露 言沾徳小一字宛給ふ早を合歡堂の中橋小住より享保十一年六月晦

十月 日詳を以て不卜々續ヶ原の判者小列て跋文を撰む



一折軒不下のぬらハ身を塵芥小隨ひありて心さしハ雲々の山を根とて  
たぐりしハ芳野の花小枝を負ひ湖水の月小琵琶をうらうて風雅のゆつ  
ことある夏年ゆり果下り先集ゆらん夏ふさひ小及ととと春秋遠く雲雪  
雨と厚と出して東籬の菊も名をさるる小唐朝の牡丹も花之を具小  
す梅の作梅の具も折れし時小たうて句も又心を驚かす小猶其之付  
す林少して花の香の清きふつき色さき木の子を指ひて左右小うらして  
積て四郎もふり判士もふり小をて我もその一もふり誠や聲小ふり  
者の笛をのりしむお似たりとつらんささやも青管の目とぬい鴉鴉の口と戸  
さくむ夏ゆりしハ貞享卯の年甲を江上の潮小とて終小芭蕉庵の  
宵夜の燈小對せ

○十日其角の家にて芭蕉餞別の延を閑く

旅人とか名 芭蕉 由之 其角 枳風 文鱗 仙化

魚兒觀水 全峯 嵐雪 舉白以上十一吟して四十四成續虚栗小也卯辰紀  
行林小吉野紀行後小又庚午紀行 等と称す元禄元年月小辨き神無月の初空定りふさき卯辰紀身ハ風葉の行未  
るさ心地して「旅人とか名呼まはる初時雨」卯辰紀山茶花を肴くよけ「岩城  
の住長太郎とふもの此眼を付て其角亭とわけて閑かたり」卯辰紀先ととてふす

○日詳ふらば餞別俳諧真行

江戸さかへ心 濁子 芭蕉 嵐雪 其角以上 通ひ 或時雨 四吟して 哥仙一折多 伊賀 餞別 小也

○同上俳諧真行

白くみ小蛤を 夕菊 岩平 執筆 以上一類十句小止む 伊賀 餞別 小也

○同上俳諧真行

時雨く小鎌 米白 芭蕉 淡石 二齋 其角 以上十句小止む 伊賀 餞別 小也

芭蕉江戸を遊て故郷小還る詩哥俳の朋友ハ人餞別也

卯辰紀行 時ハ冬よ

野をあや旅の土産此句ハ露沾公より下給ひし主侍りたるをむよめてふむ  
けの初三して旧友親疎門人等りの詩哥文章をよて訪ひ或草鞋の料を色て  
志を見り彼の三月の糧を集小力入且紙布綿小ふりふとの帽子を  
たづまの物心く小送つていて霜雪の寒き若とてふ小心ふりや小  
船を渡別墅小あけし草庵小酒肴を携来りて行末を視し各残  
を惜みふとまをて故郷人の首途をるも似たり

丁卯孟冬下音 芭蕉餞別詩 四拾人

詩九首七人 和哥三百三人 俳諧 俳諧句五 廿五人

芭蕉庵主枳青 餞別詩哥并俳諧句皆貞享卯四丁卯歲十月廿五旅  
行

奉送芭蕉桃先生驛

上州人宗草

拂衣何處去，憶御泥雲中生。遂換樵樂懷，住詩酒濃。桃青涼水浪，松綠寶頭風。徑雪向寒驛，離情萬事空。

送桃青隱士故鄉

釋南州

霜深楓林夕，友人歸故鄉。江山無盡錦，松青落葉黃。

奉送芭蕉公和赴干故鄉

怡峰正詰拜州

這箇道人無所住，暫辭東海故鄉園。離過霜葉有殘菊，僮僕歡迎可待門。

芭蕉老人有故赴鄉國，老人常謂他鄉郎。吾鄉今猶莫作戲斯語，昔何不信斯語乎。因終早語三絕以搜頭陀。

其二

素堂山子

君去蕉庵莫止，御故人多處。即成鄉風，食露宿豈勞。意怕衣素無何有，鄉

其三

弱差瘦笻寄一身，離庭回首惱吟身。河邊楊柳無由折，早動翠條迎老身。

其四

陰月稱陽又小春，小春又那似陽春。舉盃皮裘陽春在，為唱陽關一曲春。

奉送芭蕉翁赴干故鄉

桐山正堅

東西兩地學參高，獨向北風伴雁行。汲々浮生如一夢，飯後來日較平康。

餞別二四六八十言部詞不章故旁點

友松政宣稿

霜散道中，杖直穿影。笠面載晴，君往伊列別業。我留江府金城，冬夜長，雲長坐夢破。逸興飛雲，飛佳句成。敲枕尚宜聽，處々寒山寺。日和雁，輕得天倫娛樂情。

同

去らうり小蛤判るくうせ霜夜の鐘

松江

故に十歸多を運うてとて

我ちらうり去る一ほらん雪のころ

嵐山

多をたたり唐うの古風をうりて俳諧をのび

今人并稿

送君小橋側，分袂隔西東。動風岸上柳，散霜林下楓。遙想多病軀，長路豈無仲。飄然王蒙子，句丈任天工。顏節高里雪，破笠孤村雲。宮根山巖々，大井川洪々。登嶺強莫步，臨水又來馳。無事到故園，先傳平安表。佳景坐勝地，只恐久認蹤。徒今在與月，獨吟望蒼空。

餞別

くうりふわさるくかけりてや 遊園  
何れもしてささくさふたらん

Vertical title or header text in a box on the right page.

Main body of vertical Japanese text on the right page, enclosed in a large rectangular border.

Main body of vertical Japanese text on the left page, enclosed in a large rectangular border.

たらしめはるをわらわむるねよ  
世をばあはれな國よわくしよ

安通

離別

かゝるの別もさうさうむきあはれ  
さうさうの別もさうさうの別も

全

さるる主まじりく故園小わりの  
人ハたそそて送るこも小我此ふと小わつふにむうまらあーめさひ小  
かよひつるころむらの鳥巾を傳ふ是をいりて室と才小わりのむら

栗

月

日

日

栗

千

栗

日

日

日

日

まらあーの吉野のむくの頭巾か  
留子のうらむやまなごー冬の菊  
啼千鳥不二を見之きし見坂  
橋より供して語らん霜路ふ  
暮むしり留子を啼く霜の庵  
三ツもや千鳥ハ残る波の声  
来月ハふを雪ふらん一しき  
霜遠くちつさうせのり日か  
朝一の紙ハヤれもさうむつのも  
旅年とて帛ハさうはるうらま

素堂  
不卜  
秋風  
仙化  
北觀  
而已  
ちり  
萩風  
李下  
松風

葉下の好まのわのく向けりあわりの君ハよりわをこめて思ひをりく  
りか人候して是をわくさうさうの紙小の霜雪もていともおこさる  
りまよ

同

同

同

千

千

千

千

千

千

千

千

千

千

千

千

千

ぬきんてわくりりらんしんしん  
冬の目を摘まらるるほりまきさか  
東来紫氣

文鱗  
侯石

能諧説て關路を通るしとまふ  
我夢をてさむ霜の草まきさ

曾良  
宗波

初雪や右卿よまきさ梅のこもか  
山や橋へ見ても冷るる門の霜

泥芥  
苔翠

誰か家小水音を留る雪の楳  
初雪や冬立の里まきさ

夕菊  
風泉

霜踏して月を足ちり草まきさ  
いひやくしとまきさ雪の笠

水萍  
翠桃

朝霜や師の怪おまふ雪のまき  
こころ山時雨あまきさ朝のひま

野馬  
申之

十徳小綿をいひささ霜路まき  
宿をらまき雲初れまき朝茶めせ

狐屋  
加泥

十

夜看をかり女とつら... 旅の宿  
露荷  
小千  
牧足  
沾蓬

風の子をかりく... 岩雪  
其角

○按小伊賀餞別の吟ハ續虛宗集千鳥掛集小見也... 哥詩ハ素より略一句も二集を合して二十吟を出さるる... 又二集小出する句ハ吟の頭小栗十と書名の一文字を書して是を記す也

○芭蕉旅中狂名にて風羅坊と稱也  
印辰紀行 百歳九歌敷の中小物也  
小くすもの風小破さやすつらん夏をいふや彼狂句を好む夏久〜終小生  
涙つらう夏とあすの時ハ倦て放擲さる夏を思ひける時ハまわむて人小勝  
夏受をわらう是非胸中おたがひて是も鳥小身安んば去らく身そまひ夏  
を朝下とて是も鳥小まゑらば暫くはて愚を曉ん夏を思へとも是も鳥小破

ら道終ふ無能無慮わいて只此一ま〜小けある西行の和哥小なる宗祇の連  
哥小おける雪舟の画小おける利休の茶小おける其母道まるとのハ一ありまると

風雅小おけるもの造化小まゑらひて四時を友とす見る秋花小涼風とふ夏か  
〜像花小わらうる時ハ表状小わらう〜心花小わらうる時ハ鳥歎小類も表  
状を出身歎と離れて造化小まゑらひ造化小わらふあり ○按小本朝天鑑  
の紀類小わらうる庚午紀行の注小此篇小風羅坊とハ故小和子三箇の狂名ある  
ら其後と此号あり〜且爰小文ハ此風羅坊の跋と身一〜其角亭小於  
て餞別會あり〜段と身二〜詩哥休の旧友ハ人各餞別あり〜段と身三と  
あきり然ると此書ハ時日を乱して専小か〜たはハ

○旅中尾州鳴海の驛  
紀行の文章す〜前後小あり〜身入奉ま〜

知是亭小全  
柳道の日記とふまの紀氏長明阿伴の尼の文をふまひ情  
を尽してよろ餘ハ皆傍似うらひて其糟粕を改る夏久らば  
ちて浅智短才の筆小及く〜らば其日ハ雨降り昼より晴てそ〜小松あり  
かこ小何とふ川流き〜ふとふ受たま〜とふ〜覚侍進と〜黄哥藤新の  
たくい小何とふ〜受あるま〜は述〜と其所〜の風景心小残り山鉦野亭の〜  
〜と愁も且〜の種〜あり風雲の便〜と〜お〜あ〜て心ま〜所〜  
跡や先や〜書集侍〜痴醉の者の盛語小〜〜く〜ある人の盛言ま〜  
〜い小身〜して人又〜聴〜よ ○鳴海小〜〜して〜星崎の園〜見〜と〜鳴海

千鳥掛集

序

嗚海の何れぞ知足亭小友芭蕉の公初やとらるる頃、前かま  
らく此所ハ名古屋のつるふちうく来名大垣と遠より千鳥掛小行通ひて残生を  
送らむと星寄の千鳥の吟と此折の夏ゆかしの同集芳銘序其意をいむ  
さし野と杖とまゝ古郷の空小通る時雨の作いさよとての軒端十三寄をさし  
わらわりのつたの初打つて  
そこ夏の物語小見とわをさるる

○止鐸中能讀興行

星寄の詞と芭蕉安信自笑  
以上  
如風重辰以上

七吟と哥仙成

○如風芭蕉の止鐸と訪ふ

多らりて落葉の如風芭蕉安信  
重辰自笑 知足業言以上

吟とて哥仙成の千鳥掛集小表六句と出冬圍扇集小  
可仙の全巻と出さう且詞書小芭蕉の如と足亭小訪ひ

○止錫中業言其序小

至て飛鳥井雅章郷の里坐跡を見

紀行で飛鳥井雅章の此宿あり  
給て都も遠くあることさし

海と中あるをてと詠給ひたりて自かせ給りたりをさるる小京とて  
いさよ半さまや雪のくも句集嗚海の驛本陣業言序小泊るふ飛鳥井雅章

君都をてあつてと詠

○同真とて俳諧興行

芭蕉業言知足  
如風安信自笑重辰以上

七吟とて哥仙成

○日詳るる杜国に配所を訪むと吉田の驛小越人と泊る

紀行三河の国保美とふ久小杜国とまのひて有ると訪んとつ越人小消息  
して嗚海とつ跡をよ小十里尋り其夜吉田に泊る荒野越人と吉田の驛とて  
寒くはとて二人

○路上の吟

紀行より縷手田の中細道あり海と吹上る風  
いさよ所あり冬の日や馬上小来る影法師

○三列保美邑の杜国に幽居と訪ふ

表時より芭蕉越人野仁杜国  
三吟序三とて止む幽居集小出さる

○伊良古崎小遊ぶ

紀行保美村より伊良古崎一里とらるる三河  
の國の地つとて伊勢と海をさるる一所あり

いさよ故より萬葉集より伊勢の名所の内小撰入らるる此列寄とて其名  
を指ふせ小つと白とふとや骨山とふハ鷹を打外する南の海の早よて  
鷹の始て渡る所とつらつと鷹を哥とて讀さうと思ハ猶衣る折ふ  
一鷹をさつ見つて嬉し伊良古崎

○日詳るる伊良古崎より三飯り再び知足亭小泊る

千鳥掛集芭  
蕉公初と見

一人を訪ひ三河の國小越え序おとらけは伊良古崎見むと白波よる者  
をさるるいさよとて飯り給ひ表衣を聞て燒飯やいさよ雪小崩け人知足

○止鐸中俳諧興行

燒飯やいさよ知足芭蕉越人以上  
三吟とて表六句成り千鳥掛集小出さる

○荷等野水等

芭蕉の止錫を訪ふ いづれ落葉をばかき 荷や 芭蕉 知是 ○止錫中氏雲

亭もて能諧興行 おもしろき亭や 芭蕉 自笑 知是 ○止錫中氏雲

鳴海連衆傳 知是 千代倉氏 寂照庵より 鶴亭亭より 号は 尾の鳴海の人 あり 奇人談 小勢外とせむ 誤あり 元禄十五年其死す

且知是之家毎く風雅あり母を永冬多男を蝶羽女をつひ孫女をまゐん と呼び蝶羽の妻を九小千島掛集の作者あり 安信の通称 金右五郎といふ

知是の身あり重辰と又 ○業言 寺島氏 鳴海の 本陣あり ○自笑 鍛冶を 業

名を氏雲といふ出羽守と受領中今小氏雲の家を存して小刀鍛冶あり と聞けり 同時加列山中小同名あり 辰と云ふ

十一月廿四日 熱田社小詣中 紀行 熱田御後復 唐本也 ○三度桐葉

家小泊 磨屋をわたりて 芭蕉 桐葉 以上両吟よて 哥仙成る 端書小 ○羨濃の

如行芭蕉の止錫を訪ふ 旅人し 歌名 如行 芭蕉 桐葉 以上 三吟よて 哥仙 折成る 幽蘭集より出づ ○芭蕉手

箱々桐葉小與ふ 千島掛集 及銘序 其頃翁の許よりして 熱田の桐 葉が不徒しつと 難波の春小赴くとて いふ思ひや

自負りて相物を残し 指行先の霞と消え後のふらわらとせよといひ置て出 行し終小其陣風あすといふ世をこゝろわす下浪といふなり此巻もと公卿の

句より與りしあまはせちて其傍小此爰の見やうし 桐葉の花をむささの 句よりあまはせちて思ふよりいふやうに 芭蕉の露路の形見いふ侍

らむや 杖と一葉の秋をわたりて 杖名残おも見せむをといひ 去年の五月雨小秋をまよとせぬ花とわたりて 雨の降つて送るおこさるういふ小世

ハ雨粒の玉手宮宮やりの記念とありて 許小所持しおろし 其形はさるる 婦女の玉櫛寄小似ておわいさする物も 高麗人の工を見取しうとるるぬ

りこころ小金泥の画こころやうもてけりて 見るさしむらさきも 色して物あつとる 左右あまはせち手をつけし 石小便りもやきし 芭蕉の 歩行の用は 足るぬいふ

物とて 覚ちまふ ○日詳なる 尾陽小至て 錫を止む

紀行 蓬左の人々小むくまきて 志とく 休息する程 官根越す人も 今朝の雪 ○有人の會 たりて 雪見おろる 紙わさ 行む雪見おろる 軒として ○何人興行 香を採り 梅小截見る 軒端 此間美濃 ○止錫中

大垣岐阜の好者訪ひ来りて 哥仙のハ一折ふと度 小なる



俳諧興行 芭蕉聽雪如行野水 ○同能諧興行 芭蕉昌碩

龜洞荷号 野水聽雪 越人舟泉坐 ○同能諧興行 夕道荷号 野水

芭蕉 執筆以上 兩六句小 ○岐阜の落梧芭蕉の止錫を訪ひ俳諧興行

止心幽蘭集小出 本朝のやまを余のやま哉 相葉 幽蘭集 公翁美濃を越りんと聞之り

思ひり 故小桐葉一句を寄 幽蘭集 能く小つより香きよら

○木因芭蕉と招小一句を送 幽蘭集 按小桐葉句木因句と

小芭蕉の脇あり是を略して本朝文態の度千紀行より芭蕉美濃小至りて

思ひを早き紀行に詳 美濃小至り思ひり見へて

十一日 詳からば尾陽を發して古郷小行く 紀行 師去十日余各

○路中杖尖坂小落馬 紀行 来名よりして

つら坂を落馬 物より

○日詳 故

郷小飯て旧を懐 千馬御集 代々の

中 古郷や橋の緒

○止鐸中門人會て落馬の句小脇を賦 古郷や橋の緒

風と志ろ皆服して見たりりりかのくすまへく附て見侍まは心小  
 つまびらいて風と前のかやち牛もらるるの「土世方此句をりを侍まはとや  
 とて其修取て附ら侍り  
 師の心下りらるる  
 ○晦日酒燕 【紀行】 霽の年空の名残が  
 かりと酒香夜あふる



補者

朱雀堂

桂山

芭蕉春秋前編卷之二



嘉永二年正月十日  
 同日午時授り

